



# ショートコメント

★★★

Data 2022-116

## 千夜、一夜

2022年/日本映画  
配給：ピタース・エンド/126分

2022 (令和4) 年 10 月 15 日鑑賞

シネ・リーブル梅田

監督：久保田直  
脚本：青木研次  
出演：田中裕子/尾野真千子  
/安藤政信/ダンカン/白石加代子/長内美那子/田島令子/山中崇/阿部進之介/田中要次/平泉成/小倉久寛

### みどころ

“待つ女”が2人。それが登美子（田中裕子）と奈美（尾野真千子）の2人だが、その理由は正反対だ。登美子はなぜ30年間も待ち続けているの？

オリジナル脚本に基づく本作の舞台は“北の離島の美しい港町”だが、人間の営みは複雑だ。ずっと登美子に思いを寄せている男（ダンカン）の存在も、閉鎖社会の中では人間関係をより複雑にさせるだけ。

その上、もう1人の“待つ女”だったはずの奈美は、簡単に若い同僚との再出発を決めてしまうから、アレ・・・？8年間もの歳月をかけた本作のラストの脚本は、コロナ禍もあり、書き直されたそうだが、その当否は？それを含めて、私には納得できない点がいくつもあり・・・。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

◆新聞紙評における本作の評価は高い。キネマ旬報10月下旬号では32～43ページにわたって本作を特集している。年間、約8万人の行方不明者が日本全国の警察に届け出されるが、そのうち約300人は北朝鮮に拉致された可能性も排除できない“特定失踪者”だ。すると、それにヒントを得て作られた本作は、北朝鮮による拉致問題をテーマにした社会問題提起作？

一瞬そう思ったが、そうではなく、本作はある日突然失踪した夫を待ち続ける妻、若松登美子（田中裕子）を描いたオリジナル企画だ。本作についての加藤登紀子（歌手）の新聞のコメントは「久しぶりに見る男と女の壮絶なドラマでした。いない人を愛する狂おしい日常、静けさの中の狂気。田中裕子さん、凄い！」。そう聞くと、こりゃ必見！

◆キネマ旬報には尾形敏朗氏のコラム「田中裕子の<情炎>」があり、そこでは「私と同世代で、デビュー時から見続けてきた3人の女優がいる。」との書き出しで「高橋（関根）恵子、秋吉久美子、そして田中裕子である。」と続けている。そして、「そんな3人に共通したのは、セックスを隠さないところ」と分析した上で、様々な自説を展開している。この3人の女優は、私より少し若いですが、私も大好きな女優たち。そこで書かれている女優・

田中裕子論に私は大賛成だ。しかし、本作で田中裕子が演じた“待つ女”若松登美子の姿（情炎）に、私は全然納得できない。かつて、あみんが歌った『待つわ』（82年）は出来が良かったが、本作の出来は・・・？

◆本作は、ドキュメンタリー作品出身の久保監督が、脚本家の青木研次とのコンビで書き上げたオリジナル脚本に基づくものだが、私の目には随所にアレレ？これはヘン！と思うものが登場する。その第1は、本作にはもう1人の“待つ女”として、田村奈美（尾野真千子）が登場するが、「夫が帰ってこない」との奈美の相談を聞いた登美子は一体、どんな権限で、何の調査をするの？さらに、街中で偶然失踪した奈美の夫・洋司（安藤政信）を登美子が見つかる脚本がヘンなら、その後の登美子の行動（お節介り？）もかなりヘン！さらに、夜1人で訪れてきた洋司を泊めてやるのは、あまりにヘンだ！中盤のクライマックスとなるこのシークエンスで交わす、長い会話の後、2人の間には一体何が？ひょっとして、男女の関係に・・・？

◆第2に、待つことをやめることのできない女＝登美子と異なり、奈美が求めているのは、「夫が失踪した理由を知りたい」ということだそうだが、調査を依頼する一方で、あんなに簡単に、若い男とセックスできるの？

第3に、ずっと登美子に思いを寄せている男・藤倉春男（ダンカン）のキャラはわからないでもないが、だからといって、いい歳をしてお前まで失踪するか！さらに、ある日無事に帰ってくるか！その上、ラストでの海の中での強引な求婚シーンは一体ナニ？

第4に、登美子が30年間も夫を待ち続けていることに、夫の両親をはじめ、周囲の人たちはみんな「もういいよ」と考え、「藤倉の求婚を受け入れては・・・」とアドバイスしているのに、登美子はなぜ応じないの？あるいは、なぜ明確に拒否しないの？その結果、自殺をほのめかしていた藤倉まで“失踪”してしまったら、登美子は“ひどい女”として、閉鎖社会の中では、もう生きられなくなるのでは？その他、私には、本作の脚本には納得できない点がいっぱいだ。

◆北の離島の美しい港町（ロケ地は佐渡ヶ島）を舞台とした本作は、全体的に黒いトーンで貫かれている。それはそれでいいのだが、冒頭のシーンは、畳の上でセックスする男女の姿。これは現実なの？いやいや、夜明けに目覚めた、その後の登美子の姿を見ると、これは単なる夢幻？

田中裕子は本作全編を通して微妙な心理の“待つ女”の登美子役を実に見事に演じている。それに対して、登美子と同じく“待つ女”として登場したはずの奈美が、同僚から食事に誘われた時に見せる態度がイマイチなら、いきなり、ベッドシーンが終わった後の、超現実的な（打算的な）会話を聞いていると、うんざり・・・。

2022（令和4）年10月20日記